

四世代、曾祖父からの国際交流

松本 洋

聞き手：佐多保彦 株式会社東横機 代表取締役社長



佐多：本誌のインタビューは10年に亘り各界の方々をお招きしてきましたが、21世紀を迎え改めて国際交流の重要性を考えてみたいと思い、国際交流の専門家であらっしゃる松本さんにお話を伺いたいと思います。さて、松本さんの国際交流の原点はどこにあるのでしょうか。

松本：原点の曾祖父重太郎は大阪商人で、イギリス・ブラット兄弟社の紡績機を輸入し大阪が日本のマンチェスターと呼ばれる様になった礎を築くなど多方面で活躍しました。国際的視野が広く、アンドリュー・カーネギーが既に起業家として成功し引退する直前の1899年に、生まれ故郷のスコットランドで静養していた所にわざわざ会いに行っています。重太郎は世界的な起業家とはどういうことを考え、どういう人間像なのかということを確認に行ったのです。このことを城山三郎さんが『気張る男』（文藝春秋社刊）という小説に書いて下さっています。「気張る」とは「頑張る」とはちょっとニュアンスの違う大阪弁で「目標をたてて走りきる」という様な意味です。城山さんは重太郎のスケールの大きさ、ひたむきさ、引き際のよさなどを評価して取り上げて下さったのだと思います。祖父の姿蔵はアメリカ留学中にも漢詩をたしなんだ一寸キザな国際人。父重治は国際ジャーナリストでした。父は国際交流とは文化交流であると看破し国際文化会館を設立しました。こういった代々の精神が脈々と私に受け継がれているのだと思います。

佐多：その精神とは具体的にはどの様なものなのでしょうか。

松本：人間の信頼ということでしょうか。重太郎は銀行家でもありましたが担保ではなく人に金を貸しました。姿蔵はアメリカで中国人と付き合えと重治に言いました。重治は人間として「いい人」を心掛けよと子供達を教育しました。

佐多：素晴らしいですね。ところで、松本さんご自身は国際交流では何を大切にされていますか。

松本：国際交流、特に援助ということになると、国と国、組織と

組織の協力なのですが、基本は人と人の関係です。父も「国際交流は人に始まり人に終わる」と言っておりました。人と人の関係を築くためには、相手と自分を人間として対等に置くことです。言葉ができる、できないは問題ではありません。相手はこちらが見下しているのか、衰えているのかを体感的に感じます。こちら相手も人間として対等と思い、相手にも対等と思わせることが大切です。対等になって始めて話ができるのです。人と人のぶつかり合いの真剣勝負です。

佐多：文化の違いということも考える必要があると思いますが。

松本：そうですね。例えば東南アジアですが、注意しなければならないのはアングロサクソンが持ち込んだ習慣でしょうが、日本より契約概念の浸透している社会ということです。契約（約束）を違えることを非常に嫌います。タクシーで一旦「いくらで行ってくれ」という約束で行って貰った後で日本人は値切ったりして、刺されたり撃たれたりすることがあります。日本人はつまらないことだと思うかもしれませんが、向こうにとっては刺されても撃たれても仕方がない様な重大な契約違反なのです。

佐多：松本さんはマンチェスター大学から名誉博士号を授与されていますが、松本さんご自身の国際交流はどの様な形で始まったのでしょうか。

松本：私は早稲田大学の建築科を出てイギリスに留学しようとしたのですが、丁度マンチェスター大学の副学長が国際文化会館に泊られてマンチェスターに来るなら面倒見るよということで、1956年に船で40日もかかってイギリスに渡りました。そこで Town & Country Planning を勉強しました。そんなご縁で1998年に母校から、途上国への協力に功績ありということで名誉博士号を戴きました。留学から帰った後、日本道路公団で高速道路網の建設に携わったのですが、私の性格は物づくりよりは人と関わる仕事に向いているのではないかと思い、アジア開発銀行にコンサルタントとして出向したのが私の最初の国際交流活動でした。

松本 洋 / まつもと・ひろし

1939年8月：東京生まれ

早稲田大学第一理工学部建築科卒、マンチェスター大学大学院都市計画科修了。日本道路公団のエンジニアとしてスタートしたが、アジア開発銀行出向後、国際開発センターに移籍。その後、国際協力推進協会の専務理事などさまざまな国際交流団体の役員を務めた国際交流の専門家

1991年：外務大臣表彰

1998年：マンチェスター大学より名誉博士号を授与される

現在、国際文化会館専務理事



佐多：写真集も出していらっしゃいますね。

松本：南の途上国に対する私の思いを託して『半地球』（河出書房新社刊）という本を出しました。私が20年間に訪れた58ヶ国に及ぶ南の国々で撮影した2万枚以上のスライドの中から126枚を選んだ写真帖です。これらの国々の社会環境は厳しく経済的に貧困ですが、私が目の当たりにしたのは物質的に恵まれなくとも日々を元気で精一杯に明るく生きる人々の姿であり、生き生きとした表情、キラキラした目の輝きでした。これには「どっこい南は生きている」と深く感動しました。その顔、表情を直接伝えたいと思ったのです。

佐多：松本さんはお父上の創られた国際文化会館を受け継いで専務理事をされておられますが、どんなご苦労があたりでしょうか。

松本：父が国際文化会館を創ったのは、「戦後の文化に飢えている日本の知識人を広く世界の文化に触れさせたい」という考えによるものです。その為のハードとソフトが一体になったインターナショナルハウスが国際文化会館です。そこは日本人と外国人が一つ屋根の下で議論し、食事し、泊る、いわゆるスキンシップの場です。苦労はいろいろあるのですが、時代の変化を大きく感じます。昔は文化巨人の時代で、海外の著名人をお呼びして、その方がお国に帰られて日本の文化を紹介して戴くのが国際交流でした。国際文化会館ができたことで、ルーズベルト元大統領夫人、オッペンハイマー博士、トインビー博士などの著名人が来日されました。そして日本の文化人と交流して国際文化交流が成り立っていました。しかしこれからの21世紀では、国際交流の多重化、多層化、多様化の中で国際文化会館がどの様に対応すべきかが課題になっています。

佐多：先日、日米協会専務理事の久野明子さん（本誌第33号＝1999年秋のインタビューに登場）が、会員が増えないので困るとおっしゃっていましたが、国際文化会館はいかがですか。

松本：以前は国際文化会館のサポーターとユーザーが重なっていたのですが、最近では会員の高齢化にともないサポーターとユーザー

がずれてきています。お歳を召されたサポーターの方は都心に出てくるのがしんどくなり使わない、若いユーザーの方は会員にならなくても施設が使えるなら、わざわざ会費を払うことはないとお考えになる様です。こういった状況で、会員を増やす、新しい方に会員になって戴くことは必要だと思います。私もあらゆる機会やチャンネルを通じていろいろな方と知り合い会員になって戴く様にしています。佐多さんは国際文化会館の会員の中でサポーターでありユーザーであり、且ついろいろなご意見を戴けるという数少ない貴重な方です。

佐多：ありがとうございます。最近、国際文化会館のメイン・ダイニングがクローズされてしまいましたが、利用を増やすためにも早く再開できないものでしょうか。

松本：国際文化会館の建物はル・コルビジエの弟子である前川、坂倉、それに吉村の三大建築家による戦後のマイルストーン的な建物なのですが、施設が時代に合わなくなってきています。60ある個室の内、30にはバス・トイレがないとか部屋が狭いとか、いろいろな問題があります。動態保存の考えもありますが、費用的に難しいと思います。メイン・ダイニングも経費節減ということで閉めることになってしまいました。国際文化会館の周辺の開発も進んでいますし、ニューヨークの近代美術館の様に空中権を利用して財源を作り、建て直すことで活性化ができればと思っています。

佐多：最後に、松本さんはいつも蝶ネクタイで素敵ですね。私も大好きで時々して楽しんでいます。

松本：私の蝶ネクタイのポイントは自分で結ぶことです。蝶ネクタイが結べていいことは、何かの場でこれを解いて、鏡を見ないでバツと結ぶと軽いエンタテインメントになることです。ワイフには歳を考えるとと言われますが、私はこの歳になったからこそ派手なものをしたいと思うんです。これは私の信条Public Mind、Production Mind、Play Mindの3PのうちPlay Mindで、21世紀をまだまだ楽しんで生きて行きたいと思っています。